

和歌における散らし（4）

高木厚人
TAKAGI Atshito

A 作品題名 きくの香

B 作品題名 菊の香

④文字構成

A、一行目書き出しは字幅の狭い「きく」を用いた。そこで二行目は「奈良」と漢字を用い行の幅を広くした。三行目は添える行とし、再び字幅を狭くし二行目に添わせた。左下集団は「と介」の幅の狭い行の左隣は「達」の漢字を用い幅を出した。

①素材（A・B共に）
菊の香や奈良には古き仏たち（芭蕉）

②句意（A・B共に）
菊の香が漂う奈良の町を歩いていると、その香の中で古い仏像たちがひっそりとたたずんでいる、の意。

B、一行目書き出しは字幅の広い「菊」の漢字を用いた。そこで二行目は「奈ら」とかなを用い行の幅を狭くした。三行目は添える行として字幅は狭くし二行目に添わせた。左下集団は行に広い狭い広いの変化をつけながら一行でまとめた。

③散らし構成

A、右上三行と左下二行の二集団の散らし。
B、右三行と左下一行の二集団の散らし。

⑤線（A・B共に）

各行、行頭は細い線から書き始め、行の半ばで筆圧を加えた厚みのある線を用い、行脚、収筆部分は再び細い線を用いた。どの行も一行のどこかに山場を持つように努めた。

⑥ 墨量

A、右上集団一、二、三行と徐々に墨量を減らし奥行を表現、さらに左下一行目も渴筆で書き、彼方の景色を意識、表現します。そして「達」で墨を強く入れ、緊張感を演出します。

B、右集団、一、二、三行と徐々に墨量を減らし、三行目下部には渴筆の余韻を残すように努めます。左下の一行は墨を入れませんがやや控え目にするので右三行の集団と調和しやすくしました。

⑨ 作品寸法 (A・B共に)

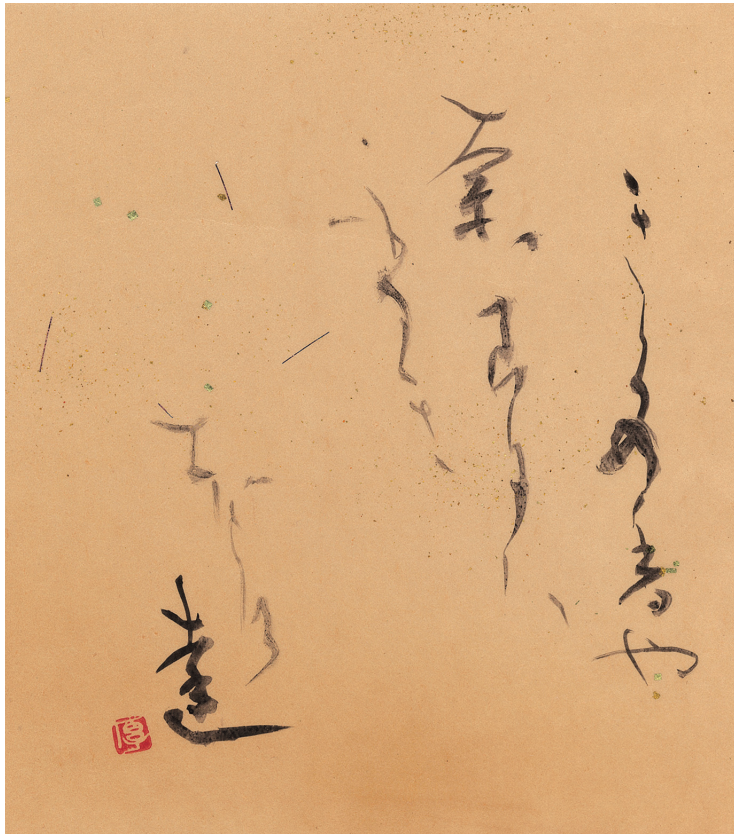
縦一八cm×横一六・七cm

⑦ 制作の過程 (A・B共に)

散らし構成、文字構成、墨の扱い全て、一行目に対しての二行目、一、二行目に対しての三行目、一、二、三行の集団に対しての四行目……といったように一行一行書き進んでいきます。この時の意識がかなの散らし書きの美意識と言えるのではないかと思います。

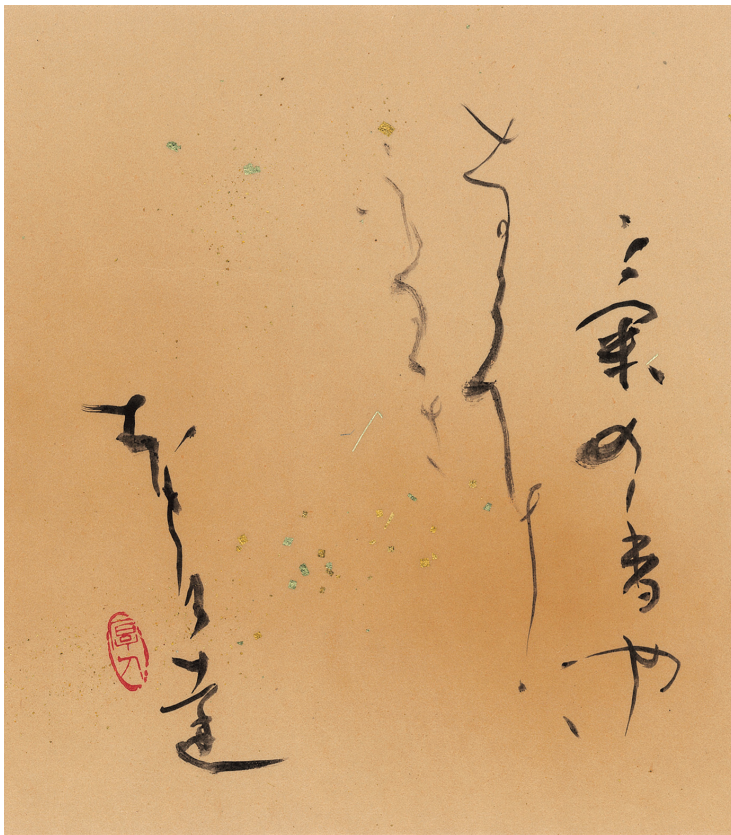
⑧ 積文

A、きく久の香久や奈良久にはふる久き久ほ久とけ久達
B、菊奈の香奈やなら奈にはふる奈き奈ほ奈とけ奈達



18cm × 16.7cm

A、
きく^久の香や奈良^尔にはふるき^本ほとけ^介達



18cm × 16.7cm

B、菊の香や奈なら耳には八ふるき本ほと介け達